

るだけ忠実に、また詳細に、原文の解釈や文法解説を試みたものである。本文も、原文を尊重して、刊本のままに従った。通釈も、余計な修飾をばいいて、簡潔忠実を目標とした。すべてにおいて、最近の「雨月物語」研究の成果をあらわそうと努力したものである。したがって、少なくとも本書の内容は、現在の研究の段階を示しているということを断言してもよろしいと思う。

本書の成るに当たっては、北海道大学の太刀川清氏にいろいろの援助をいただいた。附記して同氏に厚く感謝する次第である。

昭和三十八年八月

著者

（以下は非常に薄い影写の文字で、ほとんど不可読である。これは著者の自序の続きと思われる。）

目次

はしがき	一頁
解題	七
凡例	一七
雨月物語序	一八
白雲集の峯	二二
菊花の約	五六
卷之一	
浅茅が宿	八八

夢応の鯉魚	一一九
卷之三	
仏法僧	一三五
吉備津の釜	一六〇
卷之四	
蛇性の姪	一九〇
卷之五	
青頭巾	二四九
貧福論	二七一
索引	二九八

解題

「兩月物語」の作者上田秋成は、享保十九年（一七三四年）大阪に生れた。実父はわからないが、実母は曾根崎新地の遊女であったという。三歳の時、堂島の紙油商嶋屋に引取られ、上田氏を名乗った。実名仙次郎。養父も養母もこの仙次郎をかわいがったが、翌年仙次郎は痘瘡にかかり、命は助かったけれども、右手の中指と左手の人さし指が短い不具者になってしまった。「兩月物語」序文の剪枝崎人という号は、このことに由来する。家が裕福であり、養父にかわいがられた彼は、青年時代かなり自由な生活を送ったようである。俳諧をやってみたり、友人と遊び歩いたりしたが、友人との関係で小説や学問などの乱読もした。二十六歳で植山たま（二十歳）と結婚したが、この妻は秋成が六十三歳の時に死ぬまで、彼の糟糠の妻となった。

二十七歳で養父をうしなつた。そして秋成は嶋屋を継ぐことになった。しかし彼は、あまり商売に熱心でなく、相変らず文学に熱中していた。明和三年（一七六六）その文学熱の余りに、「諸道聴耳世間猿」「世間妾形氣」の二冊の小説を書いた。両書とも浮世草子風の小説で、世間の風俗をおもしろく描いたものである。両書とも割合に好評であった。だが翌年、賀茂真淵の弟子の建部綾足が京都に来て国学の講義を始めたので、それを聴きに行った秋成は、すっかり国学に心を奪われてしまった。綾足は、真淵の高弟加藤宇万伎を紹介してくれた。ちよと宇万伎は、大阪城の城番として大阪に来ていたからである。秋成は早速宇万伎のもとに入門した。それは明和七年彼が三十六歳の時であった。

ところが翌年、火事のために堂島の家が焼け、家は破産してしまつた。仕方なく秋成は大阪の北郊加島村に避難した。そして京都の都賀庭鐘から習い覚えた医業をもって、身を立てる決心をした。一方宇万伎に教えられた国学の勉

兩月物語序

羅子撰水滸、而三世生啞兒、紫媛著源語、而一旦墮惡趣者、蓋為業所偪耳。然而觀其文、各々奮奇態、嗚呼逼真、低昂宛轉、令読者心気洞越也。可見鑑事笑千古焉。余適々有鼓腹之閑話、衝口吐出。雉雛竜戦、自以為杜撰。則摘読之者、固不謂信也。豈可求醜唇平鼻之報哉。明和戊子晩春、雨霽月朦朧之夜、窗下編成、以昇梓氏。題曰兩月物語云。

剪枝畸人書

子孫(後人)

遊戯(趣味)

羅子は水滸を撰して、三世啞兒を生み、紫媛源語を著して、一旦悪趣に墮するものは、蓋し業の偪るところとなるのみ。然り而して其の文を觀るに、各々奇態を奮ひ、嗚呼眞に逼り、低昂宛轉、読者をして心気洞越せしむるなり。事笑を千古に見鑑すべき。余適々鼓腹の閑話あり、口を衝いて吐き出す。雉雛き竜戦ふ、自ら以て杜撰となす。則ち之を摘読する者は、固より当に信と謂はざるべきなり。豈醜唇平鼻の報を求むべけんや。明和戊子晩春、雨霽れ月朦朧の夜、窗下に編成し、以て梓氏に昇ふ。題して兩月物語と曰ふと云ふ。

通釈

羅貫中は「水滸伝」をつくったために、子孫三代にわたって啞の子が生まれた。紫式部は、「源氏物語」を著わして、一度は地獄に落ちたということだが、それは思うに、彼等が狂言、綺語という架空の物語を書いて、世間の人の心を惑わした悪事のために、その報を得たものであろう。ところでその文章をみると、それぞれにあらん限りの奇想をこらし、その調子の整い具合といい、なめらかな筆のはこびといい読者の心に作品のよさをしみじみと感じさせるのである。事は遠い昔のことであっても、今まのあたりに見ることが出来るのである。さて、私はたまたま大平の世を楽しむ人のようなのんきなむだ話をもっている。それを口から出まかせに吐き散してみても、雉が鳴いたり、竜が野で戦ったりする奇怪な話であるから、自分でもあやまり多いいい加減な話だと思っている。そんなわけで、この作品を拾い読みするものは、もとより信ずるに足るものとは云わないであろう。だからこうした話を私が書いたとて、子孫に兎脣や鼻欠けの片輪者が生まれるという悪業の報を受けるようなことがどうしてあろうか。明和五年三月、雨がはれあがって月が隴にかすんだ夜、あかり窓の下で編集して、書肆に渡したのである。